

〔事例報告〕

早期介入が必要な要支援学生の情報共有に関する試み*

坂井 美穂^{*2}, 瀧上千香子^{*3}, 黒田 匡迪^{*4}, 東寺 祐亮^{*4}

A Report on the Information Sharing of Support- Needing Students Requiring Early Intervention

Miho SAKAI^{*2}, Chikako FUCHIGAMI^{*3}, Masamichi KURODA^{*3}, Yusuke TOJI^{*3}^{*2}Department of Media Technologies, School of Engineering, Nippon Bunri University^{*3, *4}School of Engineering, Nippon Bunri University

1. はじめに

2020年度以降, 新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症対策の一環として, 遠隔授業の導入が行われ, 現在でも一部科目においてはオンデマンドやライブ形式による遠隔授業が継続されている。一方, 2021年度からは, 対面授業に移行した科目もある。

そこで, 前期科目である情報メディア学科の社会参画応用受講者と基礎学力講座・国語および数学の1stクォータ受講者に対し, 5月末時点のアンケート調査を行った結果を報告するとともに, 早期介入が必要な要支援学生の洗い出しならびに情報共有に関する試みについて報告する。

2. 出席状況について

2-1 社会参画応用

2年時の必修科目である社会参画応用は担任制の科目であるため, 比較的学生の出席状況が高い科目である。この科目の2020年度から2022年度までの初回時と5月末時点での3年間の出席状況比較について図1に示した。

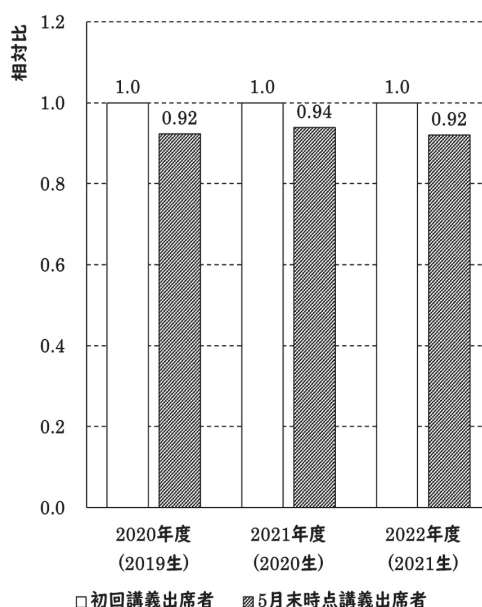


図1 情報メディア学科 社会参画応用3年間の初回時と5月末時点での出席状況比較

*2022年6月15日受理

*²日本文理大学工学部情報メディア学科 教授*³日本文理大学工学部 助教*⁴日本文理大学工学部 准教授

社会参画応用では、Google フォーム（以降 gForm）を活用し、学生の出席確認等のアンケート調査を行っている。

この講義での出席確認は、遠隔時は gForm の回答（締め切り期限あり）と Meet への規定時間の参加状況の2つで確認し、対面時は gForm の回答と座席指定による教員目視の在籍確認の2重確認を行っている。そのため、gForm のみの回答者で Meet や教室への滞りが無い場合は欠席と扱い、2020年度および2021年度は遠隔で、2022年度は対面で講義を行った。2020年度は5月始まりであったため、5月末は第4回目講義、2021年度は第8回目講義、2022年度は第7回目講義である。各年度とも初回時の出席者数を1とし、5月末時点での出席者数の相対比を示した。

図1よりすべての年度において、5月末時点での欠席者が1割程度存在することが示唆された。このことから、担任科目である社会参画応用でも欠席が多い場合、他の科目の出席状況について5月末時点で確認し、支援を開始する必要がある。

2-2 基礎学力講座・国語および数学

基礎学力講座の国語および数学についても、社会参画応用と同様、遠隔時は gForm の出席時および退室時の回答（締め切り期限あり、退室時には講義ノートおよび小テスト点数記入）と Meet への規定時間の参加状況の3つで確認し、対面時は gForm の出席時および退室時の回答（締め切り期限あり、退室時には講義ノートおよび小テスト点数記入）と座席指定による教員目視の在籍確認での3重確認を行った。

2021年度と2022年度の国語の初回時と14回目講義時点の出席状況比較結果を図2に、数学の結果を図3に示した。基礎学力講座はクォータ制科目であるため、第14回目講義が5月末時点に相当する。なお、2022年度基礎学力講座・国語の第14回目は6月1日に開講されているが、14回目で統一し、経年比較を行った。各科目、各年度ともに初回時の出席を1とし、14回時点での出席者数の相対比を示した。

2021年度の場合、初回時は対面、5月以降遠隔授業であり、2022年度は全回対面授業であった。

図2および図3より、2021年度の数学のみ第14回目の出席率が増加したが、その他はすべて減少していた。また、2022年度では、国語、数学ともに1割以上の学生の出席状況の悪化が示唆された。

以上の出席状況の比較から、初年次のリメディアル科目における欠席過多学生に対し、早期介入や科目担当教

員と担任教員による情報共有が必要であると考えている。

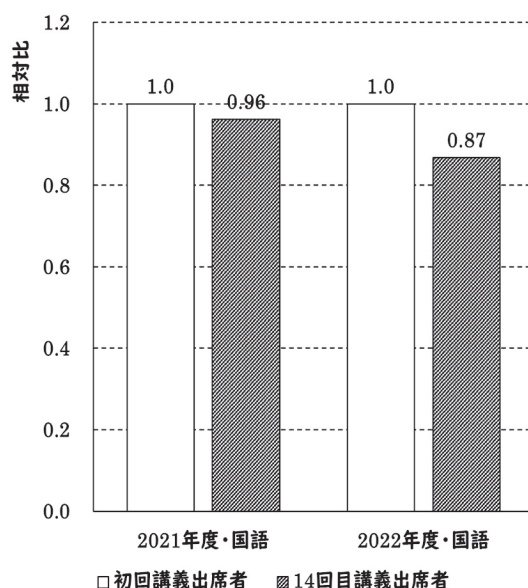


図2 2021年度および2022年度の基礎学力講座・国語の初回時と14回講義（5月末時点）での出席状況比較

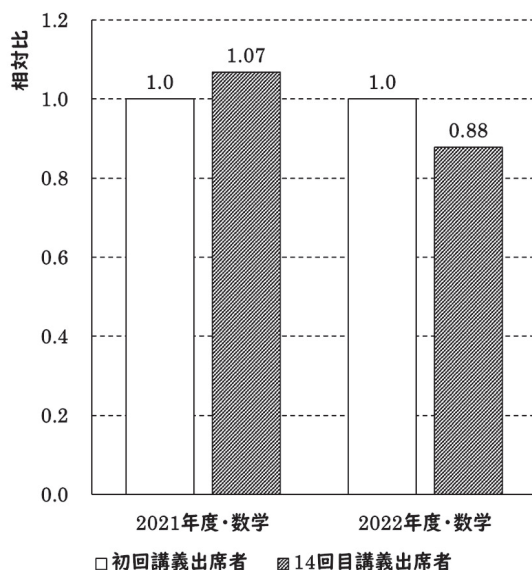


図3 2021年度および2022年度の基礎学力講座・数学の初回時と14回講義（5月末時点）での出席状況比較

3. 学生が自覚するストレスについて

今回出席状況調査を行った社会参画応用と基礎学力講

座・国語および数学の3科目でアンケート調査を行った。アンケート調査結果より学生自身が感じているストレス要因のうち、当該講義内容にかかわらない部分を抜粋し、図4から図9に示した。なお回答は複数選択可能である。

3-1 社会参画応用

メールの数、外出ができない、友人と会えない、遠隔講義、体調不良の5つの2020年度から2022年度までの3年間の推移を図4に示した。

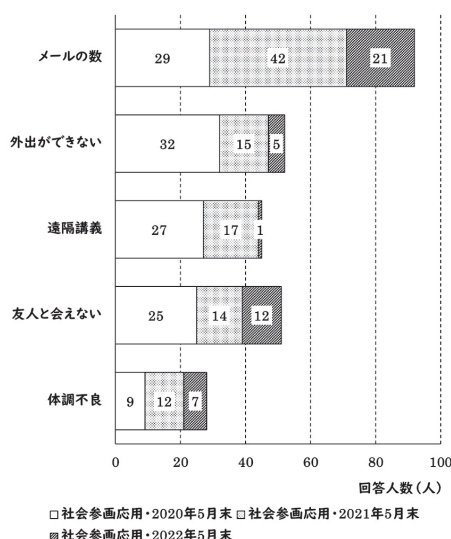


図4 3年間の自覚するストレス要因の推移

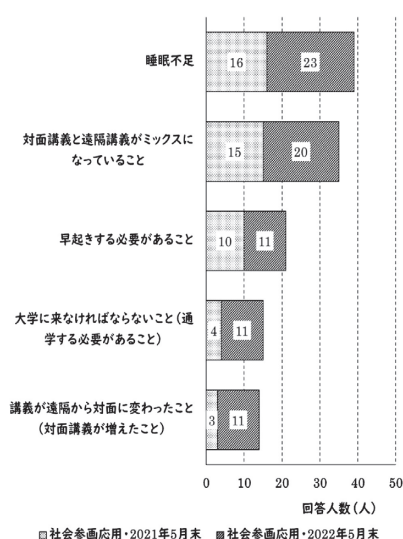


図5 2年間の自覚するストレス要因の推移

図4より対面授業ができるようになった2022年度は外出ができない、遠隔授業等のストレス要因は減少に転じている。一方で、メールの数に関しては多くの学生がストレスに感じている。これは Google クラスルーム（以降 gClass）を通じた情報配信が多くの科目で2020年度以降行われていることに起因するのではないかと考えられる。なお、社会参画応用では1回の講義当たり、2～3の課題等を配信している。

図5には2021年度、2022年度に調査した2年間のストレス要因の推移を示した。対面の授業が増えた2022年度では睡眠不足に加え、通学する必要があることや対面講義が増えたことにストレスを感じている学生が増加傾向にある。

3-2 基礎学力講座・国語および数学

基礎学力講座・国語および数学を受講している1年生の傾向についても調査し、図6～図9に示した。

基礎学力講座は、2021年度は対面と遠隔ライブ授業が半々、2022年度は全回対面授業であった。そのため、図8および図9より2021年度に受講した学生のメールの数、外出ができない、友人と会えない、遠隔講義、体調不良の5つストレス要因のうち、メールの数以外は減少していた。一方でメールの数には変化が見られなかった。なお、gClass から配信される投稿数は、国語が1回あたり4投稿、数学が1回あたり2投稿であった。

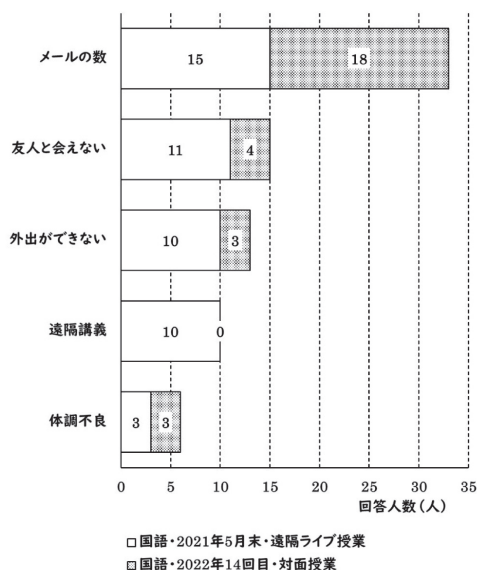


図6 基礎学力講座・国語の2年間の推移

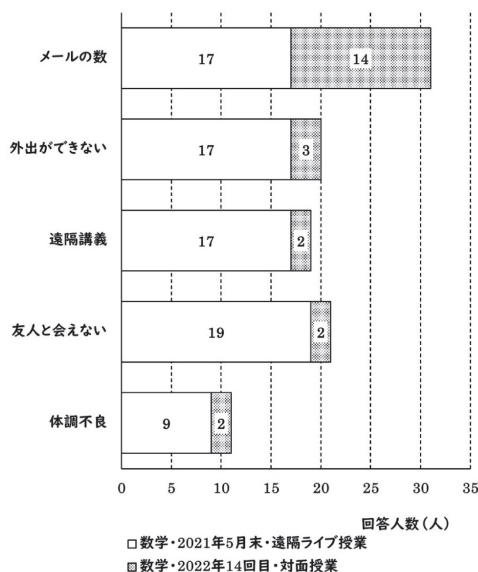


図7 基礎学力講座・数学の2年間の推移

睡眠不足や早起きする必要があること、対面講義と遠隔講義がミックスになっていること、通学する必要があること、対面講義が増えたことに5つのストレス要因に関する項目は2021年度に比べ、国語および数学共通で減少傾向にあるもしくは変化がない項目は、睡眠不足、早起きする必要があること、対面講義と遠隔講義がミックスになっていること、対面講義が増えたことの4つであった。一方で、国語と数学で異なる結果を示した項目は通学する必要があることであった。

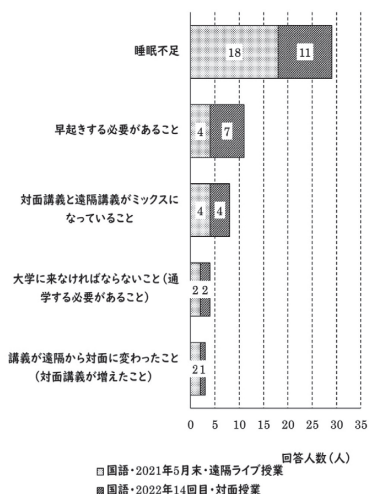


図8 基礎学力講座・国語の自覚するストレス要因の推移

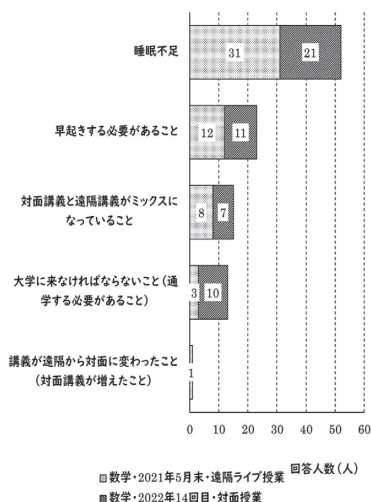


図9 基礎学力講座・数学の自覚するストレス要因の推移

このような異なる結果になったかについては履修者の学科別等詳細な分析が必要であると考えている。

図4から図9より、遠隔授業に慣れた学年の場合、対面講義が増えたことや通学する必要があることに対し、ストレスを感じていると考えられるため、これらのストレスを感じている層への働きかけやサポート体制づくりが要支援学生へのケアにつながるのではないだろうか。

4. 情報共有に関する試行

担任制科目である社会参画応用の場合、学生の履修状況や課題提出等に関し、学習支援システムのユニバーサルパスポート（以降ユニパ）で早期介入支援が必要な学生を確認することができる。しかしながら、リメディアル科目のように担任を持たない科目担当教員の場合、課題提出不足や欠席過多や2連続欠席等、早期介入支援が必要な学生に対し、学生本人に gClass を通じ、直接連絡し、課題提出不足等の注意を促す、もしくは、学生担任へ連絡し、指導を依頼することしかできないのが現状である。また、ユニパの仕様変更により、仕様変更前より要支援学生の担任確認も難しくなっている。さらに、要支援学生への指導呼びかけを毎回講義ごとに依頼するのは科目担当教員負担が増加することも問題点として考えられる。

そこで、2020年度より大学で一括契約している Google を活用し、リメディアル科目担当教員と学科専門科目学生担任教員（以降、担任）と情報共有する簡易的な方法について、2022年度基礎学力講座・国語および数学の2

nd クォータ履修者から試行を行うことにした。

使用するのは Google スプレッドシート（以降 g シート）である。今回は試行のため、大学 Google ドライブの個人アカウントの中に g シートを作成し、科目担当教員から担任へ共有を行った。参考の g シートを図10に示した。

図10 共有用 g シート

共有する情報は、①対面出席状況、②課題提出状況、③小テストを行った場合は小テストの点数等の学習履歴である。

これらを各シートに作成し、講義回終了時に科目担当教員が情報を更新し、それを担任は常時閲覧できるようになっている。なお、情報漏洩等に注意するため、閲覧権限を有する共有範囲を担任のみに指定した。

g シートは Excel ファイル同様の操作が可能である。この共有シートの利点は、いつ、だれが編集したか確認できる点である。（図11参照）

ア) g シートでの確認画面

イ) 最終編集クリック後の画面
図11 最終編集者と編集者氏名

複数の科目担任で情報を追記する際に、いつ、だれが編集を行ったか表示で確認できるだけではなく、最終編集の下線部分をクリックすることで、詳細に確認し、記入漏れや情報抜けのリスクを軽減することが可能である。

さらに、共有した担任がいつ閲覧したかどうかについても編集者はアクティビティダッシュボードによる確認が可能であるため、早期介入が必要な学生の担任の閲覧がない場合のみ、科目担当教員から担任へ学生指導依頼をすることができる。これにより毎回の依頼を行う必要がなくなり、科目担当教員の負担軽減につながると考えられる。

このような情報共有は個人情報の保護の観点から注意が必要だと考えられるが、学生が何らかの悩みを抱え大学に通学できなくなっていたり、講義に参加できなくなっていたりする状況をいち早く確認し、サポートをしていく上で重要である。

今回、基礎学力講座・国語および数学の2nd クォータで試行した。今後、この情報共有により、どの程度学生への早期介入につながったか等詳細な検討を行う必要があると考えている。

5. おわりに

COVID-19の感染の広がりにより遠隔授業に慣れ、対面での講義にストレスを感じたり、体調不良になったりする学生の増加が問題になっている¹⁾。これまでとは異なる学生の不調による怠学傾向をサポートするためには、担任だけではなく、初年次のリメディアル科目や必修科目を担当している教員との連携や情報共有により、学習状況の早期把握、学生支援への早期介入が可能になるのではないだろうか。

6. 参考文献

- 1) オンライン慣れ「対面授業怖い」、不調の訴え増加… [コロナ警告] ゆらぐ対人関係、読売新聞オンライン、<https://www.yomiuri.co.jp/national/20220601-OYT1T50088/>、2022年6月10日閲覧